

浦野匡彦伝

—上毛かるた生みの親の生涯—

岡野康幸編

はじめに

「上毛新聞」二〇一八年一月二十九日の朝刊によれば、前日二十八日（日）に前橋市の県公社総合ビルで「上毛かるた七十周年記念シンポジウム」が開催され、多くの一般市民が参加し賑わった模様である。パネリストからは「上毛かるた」を今後ともどのように活かし継承していくか提唱されている。改めて群馬県民の「上毛かるた」への愛を再認識させられた。

つらつらおもんみるに、かるたひとつにこれだけの熱い思いを県民が共有していること自体、珍しい現象ではないだろうか。「百人一首」なら歴史の長さからして納得する。だが「上毛かるた」は今年で七十年、短いとは言わないが「百人一首」と比べればやはり短い。にもかかわらず、なぜこれほど群馬県の文化として根付き、県民に支持されているのだろうか。

また日本にどれだけご当地かるたが存在するのか編者は詳らかにしないが、定着率から言っても、おそらく「上毛かるた」が一番なのではないだろうか。生粋のまたは群馬に長く住んでいる県民と会話をしていると、彼らの口から「上毛かるた」の一節が次々と出てくる。時にはかるたのパロディーも耳にするが、これを面白いと感じるためには、誰もが知っていると云う前提条件がそろわなければ、諧謔味も面白みもあつたものではない。パロディー化されるということとはそ

れだけ定着している証左なのだ。

では、群馬県民なら誰もが知っている「上毛かるた」を作った人は誰かと聞いた場合、「浦野匡彦」と果たして何人が答えられるだろうか。

70年前に発行された「上毛かるた」の生みの親で、後に二松學舎大学長となる浦野匡彦さん……。
(「上毛新聞」一面、平成三十年一月二十一日)

と、紹介されていることから、浦野を製作者と見做すことに問題はない。では、浦野はどのような人物で、いかなる意図で製作に当たったのか。それがわかれば「上毛かるた」が支持し続けられる所以の、少なくとも一端は自然と解るであろう。

この書物の基本的姿勢は、浦野の伝記であり書く際は何処に視点を当てるかは重要である。「上毛かるた」はその視点の一つである。ただし「上毛かるた」に関する話題が豊富だ、とは言わない。あくまで浦野という人間を捉える際の一つの視点に過ぎないからだ。それでも従来あまり述べられなかった点(例えば畏友濱野靖一郎君が執筆した「第五章 帰国・福祉事業」は、浦野の福祉への貢献を客観的に初めて世に明らかにしたものである)にも光を当て、新しい浦野像を示してみた。そのことで編者なりの「上毛かるた」が支持し続けられる理由も書き出している。もちろん編者の答えが納得させるものであるか否かの判断は、ひとえに読者諸賢の判断に任せられている。

「親・子・孫といった三世代の幼少期体験が、時代によって変化していく中で「上毛かるた」は世代を超えて共有している体験といえる。群馬の宝「上毛かるた」を作った浦野のこと、そして浦野の意図を多くの人が知ってくれることを願うものである。

目次

はじめに

第一章	誕生から前橋中学へ	3
第二章	二松學舎	10
第三章	留学生生活	20
第四章	満洲国官僚	47
第五章	帰国・福祉事業へ	59

第六章	「上毛かるた」と群馬文化協会……………	77
第七章	「名物理事長」の時代、二松學舎の立て直し……………	88
終章	修己治人と鰥寡孤独……………	105
語 積	……………	109
付 録	浦野匡彦社会福祉関連文章……………	130
	社会事業の民主化―日本再興への一縷の希望―……………	130
	民生委員さんに感謝する―援護会との関係から―……………	132
	一 感 謝……………	132
	二 法外援護……………	132
	三 環境整備……………	133
	私設社会事業の在り方……………	134